



Title	非漢字系日本語学習者の漢字語彙の読み書きに影響する諸要因
Author(s)	大和, 祐子; ダサナーヤカ, オーシャディ
Citation	日本語・日本文化研究. 2022, 32, p. 23-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90718
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

非漢字系日本語学習者の漢字語彙の読み書きに影響する諸要因

大和 祐子・ダサナーヤカ オーシャディ

1. はじめに

日本語では多くの漢字語彙が使用され、漢字語彙の学習なしに日本語を理解・使用することはできない。情報機器の普及により以前より漢字を手書きする機会は減ったとはいえ、日常生活でまだ漢字を書かなければならない場面は様々ある。さらに、コンピューターで漢字入力をするには漢字を含む語の読みを正確に覚えている必要がある上、変換候補として提示された漢字が正しいか判断できる漢字語彙の知識は不可欠である。そのため、日本語学習者にとっては漢字学習の成功が日本語学習の成功にも関わっている(Gamage 2003)と言われるほど重要なものである。とはいえ、学習者にとって、漢字に含まれる「形」「意味」「読み」「用法」といった多くの情報処理を行うことは容易ではない。1つの漢字に複数の読みが存在すること、各漢字の持つ意味が別の漢字と組み合わせると語にした時に同じ意味をもつとは限らないことなど、日本語学習者にとって理解しがたい漢字の特徴も少なくない。さらに、母語で漢字を使用していない、いわゆる非漢字系学習者にとっては、1つの漢字のまとまりを認識し、似通った形状の漢字でも違うものであると判断できるだけの、漢字の識別特性と弁別特性の学習が必要になる(海保・Haththotuwa 2001)。

このように、とりわけ非漢字系日本語学習者にとって難しいと考えられる日本語の漢字語彙習得には何が影響し、どのような特徴があるのか。本研究では、日本語の語彙知識との関係にも注目し、非漢字系日本語学習者の読みと書きにおける特徴と課題を考察する。

2. 研究目的

2.1. 研究の背景

日本語学習者の漢字語彙習得研究はこれまでも数多く行われてきた。ここでは、本研究の研究対象である非漢字系日本語学習者にとって日本語の漢字語彙の読み書きがどのようなものであるか、また非漢字系日本語学習者にとって漢字の読み書きに影響するのはどのような要因があるかという2点を中心に先行研究をまとめる。

2.1.1. 非漢字系日本語学習者にとっての漢字語彙の読み書き

日本語を母語としない学習者にとって、日本語の表記法の複雑さは日本語学習を進める上で難しいと感じる点の1つである。本田(2020)は、日本語の漢字の表記法の複雑な点として、漢字を1,000字から2,000字ぐらい覚える必要があること、形が非常に複雑なものがあること、ひとつの字にいくつもの発音と意味があること、そして訓読みについては、字形(構成)と発音の間に関連性や法則がないことを挙げている。

このように日本語を学ぶ上で困難点となると考えられる漢字の特性の中でも、とりわけ漢字の読みは、日本語学習者にとって苦手意識を持ちやすいが、学習のニーズが高いものもある。フランスの大学で学ぶ日本語学習者に対して漢字学習への意識を調査した柳田(2011)では、学習者が学年を問わず漢字学習で最も難しいと考えているのは漢字の読みであると報告している。実際、旧常用漢字 1,945 字のうち約 60%が音読みと訓読み両方を持つ漢字である(Tamaoka, Kirsner, Yanase, Miyaoka, & Kawakami 2002)ことを考えると、学習者がいかに多くの漢字と各漢字が持つ複数の読みを覚えなければならないかわかる。また、母語でアルファベットなど表音文字を使用している学習者は、漢字の意味がわかったとしても、その漢字の読みがわからないと気になるという大北(1995)の指摘を踏まえると、多くの非漢字系学習者にとって漢字の読みがわかるようになりたいというニーズは高いものと思われる。このような漢字学習のニーズは日本語学習を始めて間もない初級の学習者でも同様で、初級の非漢字圏出身の日本語学習者に対して漢字学習ニーズを調査した宮原・藤森(2020)でも、学習者は特に漢字の読みと意味が理解できるようになりたいと考えていることがわかっている。

加えて、非漢字系学習者にとって、中国語母語話者など漢字系学習者にはない漢字学習の課題として、漢字の形に慣れることが挙げられる。漢字の識別特性と弁別特性の学習は、多くの場合、非漢字系学習者が母語における文字学習の経験を応用できない部分であり(海保・Haththotuwa 2001)、学習者の負担になるものであると考えられる。谷口(2017)は、漢字学習を始めたばかりのマレー語母語話者に対して、5 秒間提示された漢字を 7 秒間で紙に再生するという課題を行ったが、完全に再生できた漢字は全体の 50.4%にとどまった。これは、非漢字系学習者にとって、初めて見る漢字のパターン認識が難しいことを示す結果であると考えられる。ただし、このような結果を解釈するには谷口(2017)の調査対象者が漢字未習者であることも考慮しなければならない。非漢字系学習者であっても、日本語を学習が進み漢字に接触する機会が増えれば、漢字の構成要素を手がかりに漢字をすばやく認識することができるようになると考えられる。一方で、非漢字系学習者の漢字の捉え方は、日本語母語話者あるいは漢字系学習者とは違うことを示す研究結果もある。ヴィモンヴィタヤー(2013)ではタイ語を母語とする日本語学習者に提示された 2 つの漢字の異同を問う実験を行ったところ、雰囲気は似ているが異なる漢字を提示すると学習者は同じ漢字であると誤認しやすくと報告している。さらに、大和・玉岡(2017)では、非漢字系日本語学習者に漢字の正誤判断課題を行ったところ、疑似漢字の判断では、画数の過不足がある字で実在する漢字であると誤認することが多いこともわかった。これらのことから、非漢字系日本語学習者には、漢字の構成要素の細部まで注意を向けていない傾向があることが示唆された。このような傾向は、学習者自身が漢字を書く場合にも影響するとみられ、漢字の構成要素の細部に注意を向けていないために、漢字を正しく書けないという問題が起こると考えられる。実際、佐々木(2008)や当麻・大橋(2018)では非漢字系学習者の漢字の書き誤りを分析しているが、同じ読みをする別の漢字や意味が似ている別の漢字が代用されるケースや実在しない非漢字を書いてしまう

ケースがあったことが報告されている。このような、漢字の形に慣れることの大切さや正確に漢字を書くことの難しさは、非漢字系学習者自身も認識している。ハットトワ(2006)では、スリランカの日本語学習者に漢字の書き方における困難点を質問したところ、98.3%の学習者が「線がたくさんあって複雑である」と回答し、教育機関・学年問わず、漢字の字形の複雑性を漢字学習の困難点として挙げていることが報告されている。また、学習者は漢字を形の認識が難しいと考えているだけではなく、正しく漢字が書ける必要性も感じている。宮原・藤森(2020)は、日本国内の初級非漢字系学習者に対し、漢字を手書きする機会があるかを質問したところ、調査協力者全員が漢字を手書きする機会があると回答した。また、非漢字系学習者にとっても、手書きで漢字を書くことが求められる機会は依然多く、その大半の協力者が漢字を手書きで書けるようになりたいと考えていることが報告された。

以上のように、日本語の漢字の読み書きは、非漢字系学習者であるからこそその困難点もあるものの、日本語を理解・使用するには漢字学習が必要だと学習者自身も考えていることがわかる。しかし、学習者が漢字学習の困難点あるいはニーズとして挙げているものの多くは、文字としての漢字の読み・意味・形に着目しているものである。これは、漢字の文字としての特殊性が強調されがちであること、そして非漢字系学習者自身も漢字を学習する際にその特殊な点に注意が向きやすいことなどが影響していると考えられる。しかしながら、日本語の中で漢字を理解・使用する際には、漢字1文字の理解だけではなく、漢字を含む語としての読み・意味を知っていなければならない。例えば二字漢字語は国語辞典に収録されている語の約70%を占める(Yokosawa & Umeda 1988)とされるが、その中には「会社」／「社会」のように語を構成する漢字の順序が入れ替わることで意味が異なる語、「家庭」／「過程」のように読みは同じでも構成される漢字が異なる語など、語として読み・意味・形が連携されていないと適切に使分けられない語も少なくない。このような語レベルでの漢字の難しさを指摘する先行研究は数少なく、また学習者自身も1文字単位ではなく語単位で漢字語彙を増やしていく必要性は十分に認識していない可能性がある。

2.1.2. 漢字語彙の読み書きの習得に影響する要因

では、日本語学習者が漢字語彙の読み書きができるようになるには、どのような知識・能力が必要となるのか。大和・玉岡・熊・金(2017)は、韓国人日本語学習者3人に対して日本語の語彙テスト、漢字の読み取りテスト、漢字の書き取りテストを行い、それぞれのテストの得点から日本語の語彙知識と漢字の読み書きの因果関係モデルの検証を行った。その結果、日本語の語彙知識がまず漢字の読み取り能力に貢献し、漢字の読み取り能力を介して漢字の書き取り能力に貢献するという逐次モデルが、韓国人学習者の語彙知識と漢字の読み書き能力の因果関係を説明するのに最適なモデルであることが明らかになった。つまり、この結果は日本語の語彙知識が漢字の読みを正しくできるようになるのに不可欠であり、漢字の書き取りにおいても日本語の語彙知識が間接的に影響を与えていることを意味する。この結果から、

韓国人日本語学習者に限らず、日本語学習者の日本語の語彙知識は漢字の読み書きに強い影響を及ぼしているとみられるが、漢字語彙の読み書きの習得には、語彙知識以外にもさまざまな要因が関わっていることが先行研究で指摘されてきた。以下、漢字の読み取りと漢字の書き取りに分けて、それぞれへの影響要因について指摘した先行研究を挙げる。

漢字の読みの正確さについては、まず母語の書字形態が影響することが知られている。玉岡(2000)では、英語を母語とする日本語学習者と中国語を母語とする日本語学習者に対して、ひらがな・カタカナ・漢字の読みを問い、その命名潜時(音読を始めるまでの時間)と正答率を比較した。その結果、各母語グループの漢字表記語の命名潜時において中国語母語話者は英語母語話者より迅速に読み上げることができ、正答率でも中国語母語話者が英語母語話者より有意に正確に読み上げることができた。このように母語の書字形態に漢字が使用されているか否かは、漢字語の読みの効率性に影響を与えることがわかっている。では、母語の書字形態に漢字が使用されていない非漢字系学習者の漢字の読みに影響を与えるのはどのような要因なのか。大和・玉岡・熊・金(2017)で漢字の読み書きとの関係が明らかになった学習者の日本語の語彙知識といった学習者要因以外にも、漢字の読み取りテストで問われる漢字の特徴も漢字の読みに影響すると考えられる。例えば、Kaiho & Saito(1989)は日本語母語話者の児童に対して漢字の読み取りテストを実施したところ、時間の経過にしたがって訓読みすべき漢字語の得点が低くなっていくと報告している。これには、漢字に複数ある読み方が関係していると考えられる。日本語学習者の場合も日本語の学習が進み、1つの漢字に対して複数の読みがあることがわかると、漢字語彙を読むとき、その漢字を音読みすべきか訓読みすべきか混乱する可能性がある。また、Kaiho & Saito(1989)の結果を踏まえると、非漢字系学習者も訓読みする語は音読みする語より正確に読むのが難しいと予想される。さらに、日本語学習者にとっては、漢字および語の難易度も提示された漢字を正確に読めるかということに影響すると考えられる。

一方、漢字の書きの正確さについても、まず学習者の母語の書字形態が影響することが指摘されている。母語でも漢字を使用する中国語母語話者は、一般的に漢字学習には有利であると考えられることが多い。しかし、中国語母語話者に対して日本語の漢字二字熟語の書き取りテストを行った張・玉岡・初(2017)では、80名の平均正答率が58.6%と低かったという。これは、中国語母語話者にとって、日本語の漢字の読みと書字が対応して学習されていないためだと張・玉岡・初(2017)では述べている。また、同研究では、中国語母語話者の書き取りの正確さに最も強く影響しているのは、語の使用頻度であり、次いでその漢字二字熟語が中国語にも存在するかどうかということであったと報告している。一方、中国語母語話者の場合には、漢字の書き取りの正確さに日本語の語彙知識は限定的に影響しているのみであったという。中国語母語話者と同じく漢字文化圏の学習者と分類されることもある韓国語母語話者について漢字二字熟語の書き取りテストを行った宮岡・玉岡・林・池(2009)では、日本語の語彙知識が豊富な学習者は使用頻度が低い語でも正確に書き取ることができたと報告して

おり、日本語の語彙知識が漢字の書き取りの正確さに影響していることが示されている。また、同じ漢字を含む二字熟語であっても高使用頻度語が低使用頻度語より書き取りの正答率が高いことから、韓国語母語話者は日本語母語話者の場合(玉岡・高橋 1999)同様、語の単位で漢字を想起する傾向にあると指摘している。非漢字系学習者の場合は、未知漢字を短時間で記憶し再生する課題を行っている谷口(2017)があるが、その結果からは、非漢字系学習者にとって再生が難しい漢字の特徴が明らかになっている。同研究によると、最も再生の難しさに影響する漢字の特徴は漢字の視覚的複雑性(画数)であり、次いで漢字の直線性や対称性が二次的な影響要因として示された。この結果は、日本語母語話者の漢字の書き取りに書字的複雑性の影響があるとした玉岡・高橋(1999)や中国語母語話者に対して中国語の漢字語彙処理に書字複雑性の影響があるとした Leong, Cheng, & Mulcahy(1987)と共通している点である。つまり、母語話者でも学習者でも、漢字を想起して再生する(書き取る)場合には、漢字の書字的複雑性が影響要因となる。これらの結果を踏まえると、漢字の書き取りには語を構成する漢字の書字的複雑性が影響することが予想される。

このように、非漢字系学習者への漢字の読み書きへ影響を及ぼす要因については、日本語の語彙知識との関係を調べた研究、漢字の読み取り能力あるいは漢字の書き取り能力に関連があると予想される1つの要因の影響を調べている研究がほとんどであり、同一調査協力者(非漢字系学習者)の漢字の読み書き両方について、それぞれの背景にある影響要因を総括的に調査した研究は管見の限り見当たらない。そこで、本研究では、非漢字系学習者の漢字の読み書きの特徴と背景にある影響要因について明らかにする。

2.2. 研究課題

本研究では、先行研究を踏まえ、次の3点の研究課題をたてた。

- (1)非漢字系日本語学習者の漢字読み書き能力と語彙知識にはどのような関係があるか。
- (2)非漢字系日本語学習者の漢字の読み誤りに影響する要因はなにか。非漢字系日本語学習者の読み誤りにはどのような特徴があるか。
- (3)非漢字系日本語学習者の漢字の書き誤りに影響する要因はなにか。非漢字系日本語学習者の書き誤りにはどのような特徴があるか。

本研究では、非漢字系日本語学習者を対象に実施した語彙テスト、漢字語彙の読み取りテスト、漢字語彙の書き取りテストの結果を用いて、上記の研究課題を検証する。具体的には、研究課題(1)を検証するために、語彙テスト・漢字読み取りテスト・漢字書き取りテストのそれぞれの相関を調べる。研究課題(2)を検証するために、漢字読み取りテストを用いて、読み誤りに関わる要因を総括的・階層的に明らかにする。さらに、学習者の読み取りテストにおける解答から誤答を抽出し、分類することで、読み誤りの傾向を検討する。研究課題(3)を検証するために、漢字書き取りテストを用いて、書き誤りに関わる要因を総括的・階層的に明らかにする。さらに、学習者の書き取りテストにおける解答から誤答を抽出し、分類するこ

とで、書き誤りの傾向を検討する。最後に、研究課題(1)～(3)の結果に基づいて、非漢字系日本語学習者の漢字の読み書き能力の特徴と課題を考察する。

3. 研究方法

3.1. 調査協力者

本研究の調査協力者は、シンハラ語を母語とするスリランカ人日本語学習者²⁾83名(平均年齢21.11歳、 $SD=2.52$)であった。このうちの43名はスリランカ国内の大学で日本語を専攻している者(1年生13名、2年生11名、3年生12名、4年生7名)である。この他の40名はスリランカ国内の中等教育機関で日本語を学んでいる者である。スリランカでは、中等教育レベルでの日本語教育が盛んに行われており、高校卒業試験兼大学入学試験(通称「Aレベル試験」)の科目として日本語を選択することも可能である³⁾。そのため、本研究の調査協力者の日本語学習歴は平均4年6ヶ月($SD=2.0$)と、日本国外の日本語学習者グループとしては長い。ただし、日本滞在経験がある調査協力者は大学に所属する1名(日本滞在期間1年)のみであり、本研究のほとんどの調査協力者はスリランカ国内のみで日本語を学んでいると言える。

3.2. 日本語語彙テスト

日本語語彙テストは、大和・玉岡・茅本(2016)で開発された非漢字系日本語学習者向けの日本語語彙テストを使用した。このテストは旧日本語能力試験(以下、旧JLPT)配当級2級・3級・4級の語をターゲット語とした36問からなる四者択一の語彙テスト(1問1点36点満点)である。ターゲット語は難易度が調整されているだけでなく、語種(和語・漢語)と品詞(名詞・形容詞・動詞)が均等になるよう調整されている。つまり、このテストは漢字語彙の語彙知識のみを測っているものではなく、日本語で使用する一般語彙の語彙知識を測っているものである。また、この語彙テストはターゲット語のレベルを考えると、初中級レベルの語彙知識を測定するテストである。

大和・玉岡・茅本(2016)では、このテストをフィリピン人日本語学習者103名に対して試行し、クロンバックの $\alpha=0.74$ と内的一貫性が高いテストであることが確認されている。さらに、この語彙テストの各項目の正誤に最も強く影響する要因がターゲット語の語彙レベル(旧日本語能力試験配当級)であることが明らかにされており、語彙の難易度を反映した語彙テストであると言える。

本研究の調査対象者の中で日本語学習歴が短いと思われる、中等教育機関で日本語を学ぶ40名の申告によると、日本語能力試験受験経験がある者は35名で、そのうちN5合格者が7名、N4合格者が27名、N3合格者が1名であった。このことから、本研究の調査対象者には初中級レベルの日本語能力を測定できる試験が適当であると考え、大和・玉岡・茅本(2016)の語彙テストを使用することにした。

表1 漢字読み取りテスト

項目番号	旧JLPT漢字級	画数	熟語 単漢字	ターゲット	語種	語彙級	漢字級	画数	画数条件	問題 番号	設問文
1	2級	多	二字熟語	率直	漢語	2	22	11+8	13画以上	5	彼は(率直)にものを言う人だ。
2				競争	漢語	3	22	20+6	23	(競争)はますます激化している。	
3				頼る	和語	2	2	16	7	他人に(頼)ってばかりではいけません。	
4				流れる	和語	2	2	10	18	川の水が(流)れる音が聞こえます。	
5	2級	少	二字熟語	反省	漢語	2	22	4+9	12画以下	2	彼は今回のことをととも(反省)しているようだ。
6				公式	漢語	2	22	4+6	13	このイベントは(公式)なものです。	
7				示す	和語	2	2	5	8	グラフに(示)すとよく分かります。	
8				改める	和語	2	2	7	21	考えを(改)めたほうがいいと思います。	
9	3級	多	二字熟語	家族	漢語	4	33	10+11	13画以上	22	(家族)は何人ですか。
10				教室	漢語	4	33	11+9	4	(教室)はどこですか。	
11				集まる	和語	3	3	12	16	みんな(集)まりましたね。	
12				悪い	和語	3	3	11	1	山田さんに(悪)いことをしました。	
13	3級	少	二字熟語	作文	漢語	3	33	7+4	12画以下	3	(作文)をかいってください。
14				牛肉	漢語	4	33	4+6	12	(牛肉)が食べられますか。	
15				妹	和語	4	3	8	19	(妹)は大学生です。	
16				赤い	和語	4	3	7	10	(赤)いかさはどれですか。	
17	4級	多	二字熟語	金魚	漢語	4	44	8+11	13画以上	15	(金魚)が2ひきいます。
18				外国	漢語	4	44	5+8	11	これは(外国)の車です。	
19				買う	和語	4	4	12	20	この店でお昼ごはんを(買)いました。	
20				道	和語	4	4	12	6	この(道)をまっすぐ行ってください。	
21	4級	少	一字熟語	出口	和語	4	44	5+3	12画以下	24	(出口)はこちらです。
22				六年	漢語	4	44	4+6	9	ミラーさんはアメリカに(六年)すんでいます。	
23				休む	和語	4	4	6	17	今日は(休)んでもいいですか。	
24				花	和語	4	4	7	14	ミラーさんに(花)をもらいました。	

表2 漢字書き取りテスト

項目 番号	JLPT 漢字級	回数	熟語 単漢字	ターゲット	語種	語彙級	漢字級	回数	回数条件	問題 番号	設問文	
1	2級	多	一字熟語	比較	漢語	2	22	4+13	13画以上	21	AとBを(ひかく)すると、Aのほうがいいようだ。	
2				悲劇	漢語	2	22	12+15	9画以上	9	もうこんな(ひげき)が起こらないように祈っています。	
3				暮らす	和語	2	2	2	14	9画以上	23	父は東京で(く)らしています。
4				配る	和語	2	2	2	10	7	7	これからテストを(く)ばります。
5	2級	少	一字熟語	存在	漢語	2	22	6+6	12画以下	22	あたらしい生物の(そんざい)が確認された。	
6				予定	漢語	3	22	4+8	17	17	もうすぐ、引越しをする(よてい)です。	
7				互いに	和語	2	2	2	4	8画以下	24	これから(たが)いに連絡しましょう。
8				坂	和語	3	2	7	7	5	5	この(さか)をのぼると、着きます。
9	3級	多	二字熟語	産業	漢語	3	33	11+13	13画以上	20	この国はIT(さんぎょう)がさかんです。	
10				病院	漢語	4	33	10+10	8	8	足をけがしたので、(びょういん)に行きました。	
11				答え	和語	3	3	12	12	9画以上	10	(こた)えがわかった人は、手をあげてください。
12				暑い	和語	4	3	12	12	3	3	夏はとて(あつ)いです。
13	3級	少	一字熟語	夕方	和語	4	33	3+4	12画以下	6	(ゆうがた)、スーパーへ行くと、スーパーへ行くつもりです。	
14				兄弟	漢語	4	33	5+7	11	11	私には2人の(きょうだい)がいます。	
15				使う	和語	4	3	8	8	8画以下	16	このペンを(つか)ってもいいですか。
16				走る	和語	4	3	7	7	2	2	時間がありませんから、(はし)りましょう。
17	4級	多	二字熟語	新聞	漢語	4	4	13+14	13画以上	19	かばんの中に(しんぶん)があります。	
18				会社	漢語	4	44	6+7	1	1	山田さんは(かいしゃ)で働いています。	
19				南	和語	4	4	9	9	9画以上	14	(みなみ)には海があります。
20				読む	和語	4	4	14	14	4	4	山田さん、この字を(よ)んでください。
21	4級	少	一字熟語	百円	漢語	4	44	6+4	12画以下	15	このペンは(ひゃくえん)です。	
22				毎日	漢語	4	44	6+4	12	12	(まいにち)何時にねますか。	
23				空	和語	4	4	8	8	8画以下	18	(そら)がきれいですね。
24				耳	和語	4	4	6	6	13	13	(みみ)がいたいです。

3.3. 漢字読み取りテスト

漢字の読み取りテストは、大和・玉岡・熊・金(2017)を参考に、一部難易度の調整のため変更したものを使用した(表 1)。24 語のターゲット語の選定には、語の難易度(旧 JLPT 配当級 2 級・3 級・4 級)、ターゲットとなっている漢字数(漢字二字を問うか、漢字一字を問うか)、漢字語の画数を考慮し均等になるよう配慮した。漢字の画数は、二字漢字語の場合は語を構成する 2 つの漢字の画数の合計が 13 画以上のものを画数が多い語、12 画以下のものを画数が少ない語とした。一方、例えば「読む」など漢字 1 文字が問われている語の場合は、9 画以上のものを画数が多い語、8 画以下のものを画数が少ない語とした。ターゲット語には「今日」(きょう／こんにち)のように複数の読みが存在するものは避けたが、ターゲット語の意味が規定できるように、各ターゲット語を含む短い文を提示した。提示した文に含まれる語は、例えばターゲット語が旧 3 級の語であれば文中の語は旧 3 級または旧 4 級のもの、というように、すべてターゲット語と同じか下の配当級の語を使用した。なお、採点は、1 語について正しく漢字の読みが書けていれば 1 点、不完全なものおよび解答されなかったものは 0 点として、24 点満点で採点した。

3.4. 漢字書き取りテスト

漢字の読み取りテストは、大和・玉岡・熊・金(2017)を参考に、一部難易度の調整のため変更したものを使用した(表 2)。24 語のターゲット語の選定には、語の難易度(旧 JLPT 配当級 2 級・3 級・4 級)、ターゲットとなっている漢字数(漢字二字を問うか、漢字一字を問うか)、漢字語の画数を考慮し均等になるよう配慮した。漢字の画数は、二字漢字語の場合は語を構成する 2 つの漢字の画数の合計が 13 画以上のものを画数が多い語、12 画以下のものを画数が少ない語とした。一方、例えば「読む」など漢字 1 文字が問われている語の場合は、9 画以上のものを画数が多い語、8 画以下のものを画数が少ない語とした。また、ターゲット語には「兄弟」／「強大」のように同音異義語も存在するため、ターゲット語の意味が規定できるように、各ターゲット語を含む短い文を提示した。提示した文に含まれる語は、例えばターゲット語が旧 3 級の語であれば文中の語は旧 3 級または旧 4 級のもの、というように、すべてターゲット語と同じか下の配当級の語を使用した。なお、採点は、ターゲットとなっている漢字数に関わらず、語として正確に書き取りができていれば 1 点、不完全なものおよび解答されなかったものは 0 点として、24 点満点で採点した。

4. 結果と考察

4.1. 語彙テスト・漢字読み取りテスト・漢字書き取りテストの得点と信頼性

まず、本研究の調査協力者 83 名に対して実施した語彙テスト・漢字読み取りテスト・漢字書き取りテストの結果を表 3 に示す。語彙テスト(36 点満点)の平均は 21.77 点、標準偏差は 4.75 点で、正答率は 60.5%であった。語彙テストの最高点は 32 点、最低点は 7 点で、このテ

ストの歪度は-.488、尖度は.737であった。漢字読み取りテスト(24点満点)の平均は17.04点、標準偏差は3.42点で、正答率は71.0%であった。漢字読み取りテストの最高点は24点、最低点は9点で、このテストの歪度は-.068、尖度は-.566であった。漢字書き取りテスト(24点満点)の平均は14.98点、標準偏差は4.20点で、正答率は62.4%であった。漢字書き取りテストの最高点は23点、最低点は1点で、このテストの歪度は-.428、尖度は.375であった。なお、それぞれのテストの信頼性を表すクロンバックの α 係数は、語彙テストが $\alpha=0.74$ 、漢字読み取りテストが $\alpha=0.76$ 、漢字書き取りテストが $\alpha=0.80$ であり、いずれも高い数値でそれぞれのテストが十分に高い信頼性が確保されたテストであることが確認された。

表3 実施したテストの平均および信頼度係数

テスト	満点	<i>M</i>	<i>SD</i>	Max	Min	信頼度係数 (クロンバックの α)
語彙テスト	36	21.77	4.75	32	7	0.74
漢字読み取りテスト	24	17.04	3.42	24	9	0.76
漢字書き取りテスト	24	14.98	4.20	23	1	0.80

注 $n=83$ 。 *M*は平均、*SD*は標準偏差を表す。

4.2. 語彙テスト・漢字読み取りテスト・漢字書き取りテストの結果の比較と相関関係

漢字読み取りテストと漢字書き取りテストは、各24問からなる。両テストは次の3つの条件を統制している。第1の条件は、語の難易度(旧JLPT語彙配当級)である。漢字読み取りテストの語彙配当級の平均は3.25($SD=0.90$)で、漢字書き取りテストの語彙配当級の平均は3.33($SD=0.87$)であった。漢字読み取りと書き取りの問題各24問について独立したサンプルの*t*検定で検討したところ、両テストの語の難易度には差がなかった[$t(46)=-0.33, p=.75, ns$]。第2の条件は、漢字の難易度(旧JLPT漢字配当級)である。なお、漢字が2つある場合は、各漢字配当級を足して平均した値を用いた。漢字読み取りテストの漢字配当級の平均は3.00($SD=0.83$)で、漢字書き取りテストの漢字配当級の平均は3.00($SD=0.83$)であった。漢字読み取りと書き取りの問題各24問について独立したサンプルの*t*検定で検討したところ、両テストの漢字の難易度には差がなかった[$t(46)=0.00, p=1.00, ns$]。第3の条件は、漢字の画数である。なお、漢字が2つある場合は、各漢字の画数を足して平均した値を用いた。漢字読み取りテストの画数の平均は8.46($SD=3.16$)で、漢字書き取りテストの画数の平均は8.60($SD=3.33$)であった。漢字読み取りと書き取りの問題各24問について独立したサンプルの*t*検定で検討したところ、両テストの漢字の画数には差がなかった[$t(46)=-0.16, p=.88, ns$]。以上のように、3つの条件において漢字読み取りテストと漢字書き取りテストには差がないことがわかった。

このように、漢字読み取りテストと漢字書き取りテストの語彙については、3つの条件で統制した。しかし、漢字読み取りテストと漢字書き取りテストの24問は、異なる語彙であ

る。そのため、同じ調査協力者が両テストを受けたものの、類似した特性を持つ異なる2つのテストであると想定される。そこで、スリランカ人日本語学習者 83 名の両テストの得点を独立したサンプルの t 検定で比較した。その結果、漢字読み取りテストの平均は 17.04 点 ($SD=3.42$)、漢字書き取りテストの平均は 14.98 点 ($SD=4.20$) で、読み取りテストの得点のほうが有意に高かった [$t(164)=3.44, p<.001$]。漢字の読み取りテストの平均と書き取りテストの平均に 2.06 点もの得点差があることを考えると、本調査協力者であるスリランカ人日本語学習者にとって、漢字の書き取りのほうが読み取りより難しいといえる。

次に、表 4 に語彙テスト・漢字読み取りテスト・漢字書き取りテストの各テスト間の相関係数をまとめたものを、図 1 に漢字読み取りテストと書き取りテストの得点の散布図を示す。

表4 テスト間の相関

テスト	語彙テスト	漢字読み取りテスト	漢字書き取りテスト
語彙テスト	—		
漢字読み取りテスト	.538**	—	
漢字書き取りテスト	.432**	.735**	—

注 **は $p<.01$ を表す。

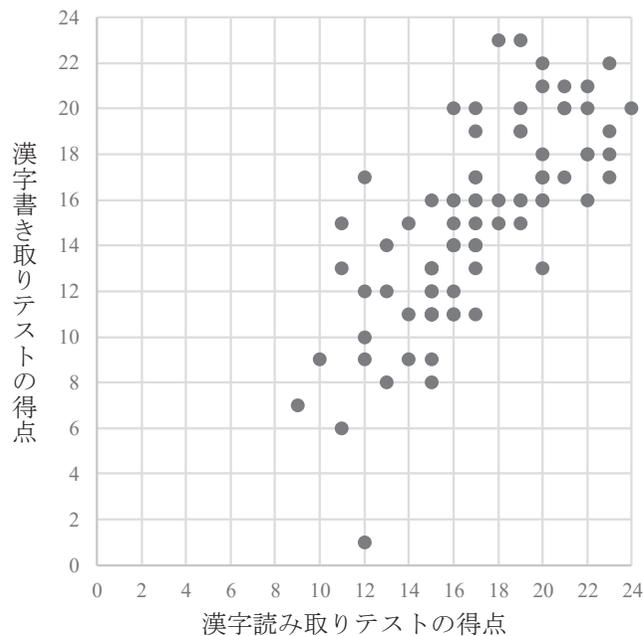


図1 漢字読み取りテストと書き取りテストの得点の散布図

注1 $n=83$. 漢字の読み取りテスト・書き取りテストともに24点満点。

注2 ピアソンの積率相関係数は、 $r=.735$.

表4で示されている通り、語彙テストと漢字読み取りテストの相関が $r=.538(p<.01)$ 、語彙テストと漢字書き取りテストの相関が $r=.432(p<.01)$ 、漢字読み取りテストと漢字書き取りテストの相関が $r=.735(p<.01)$ であった。相関係数は、一般に r の値が.00 \sim .20であればほとんど相関がない、.20 \sim .40であれば弱い相関がある、.40 \sim .70であれば中程度の相関がある、.70 \sim 1.00であれば強い相関があると解釈される(田中・山際 1992)。この解釈を本調査の結果にあてはめると、語彙テストと漢字読み取りテスト、語彙テストと漢字書き取りテストの間には中程度の相関が、漢字読み取りテストと漢字書き取りテストの間には強い相関があると言える。

漢字読み取りテストと漢字書き取りテストの得点の散布図(図1)にはデータの点の群が右上がり分布しており、この図からも漢字読み取りテストと漢字書き取りテストは強い正の相関を示していることがわかるが、一方で外れ値とみられるものもある。また、全体的には散布図の点はやや右に寄っており、漢字読み取りテストの得点の方が漢字書き取りテストの得点より高い傾向にあることがわかる。しかし、少数ではあるものの、漢字書き取りテストの方が漢字読み取りテストより高い得点を獲得している学習者もあり、非漢字系学習者の漢字の読み取りおよび書き取りの能力のバランスについて、1つの傾向にまとめて論じるのは難しいと考えた。さらに、漢字の読み書きの相関の強さと比較して、語彙知識と漢字の読み、語彙知識と漢字の書きの相関がそれほど強くないのは、学習者の中に、語彙知識と漢字の読み書きに強い関連性をもつ学習者とそうではない(例えば、語彙知識は豊富だが漢字の読み書きはできない)学習者がいるためではないかと考えた。そこで本研究では、非漢字系学習者を日本語の語彙知識、漢字の読み取り、漢字の書き取りの各能力のバランスの傾向からいくつかのタイプに分けることができるという仮説をたて、この点についてより詳細に検討することにした。

4.3. 語彙知識と漢字の読み書き能力の得点傾向から分類する学習者のタイプ

ここでは、語彙テスト、漢字読み取りテスト、漢字書き取りテストについて、本研究の調査協力者であるスリランカ人学習者83名を類似した得点パターンを示す学習者でグルーピングすることにより、非漢字系学習者に語彙知識と漢字の読み書き能力の傾向にいくつかのタイプがあることを示す。この点を検証するために、まずはクラスタ分析(cluster analysis)を用いて、語彙知識と漢字の読み書き能力のバランスから調査協力者をグルーピングすることを試みた。クラスタ分析は、多変量解析法の1つで、いくつかの変数により個人の特徴を測定し、その特徴に基づいてグループに分類する場合に有効な手法であると言われている(平井 2018)。そのため、ここまで見てきたように、調査協力者の傾向が1つではないと思われる本研究のデータのような場合には学習者の傾向を知る上で有用であると考えられる。

本研究では、語彙テスト、漢字読み取りテスト、漢字書き取りテストの得点を用いて、ユークリッド平方距離によるWard法のクラスタ分析を行った。得られたデンドログラムから

カットオフポイントを定め、83名の調査協力者を4つのクラスタに分類できると判断した。これらのクラスタの分類が妥当なものであるか検証するために、クラスタによる4つのグループを被験者間要因、3つのテストの得点を従属変数とした多変量分散分析を行った。各クラスタの記述統計を表5に、そのプロット図を図2に示す。

表5 クラスタごとの各テストの平均得点と平均正答率

	n	語彙テスト (36点満点)		漢字読み取りテスト (24点満点)		漢字書き取りテスト (24点満点)	
		得点	正答率(%)	得点	正答率(%)	得点	正答率(%)
クラスタ I	30	20	56.2	15	60.4	12	49.3
クラスタ II	33	22	61.4	18	76.8	17	71.8
クラスタ III	15	28	77.2	21	88.1	18	76.7
クラスタ IV	5	11	29.4	11	45.0	9	35.8

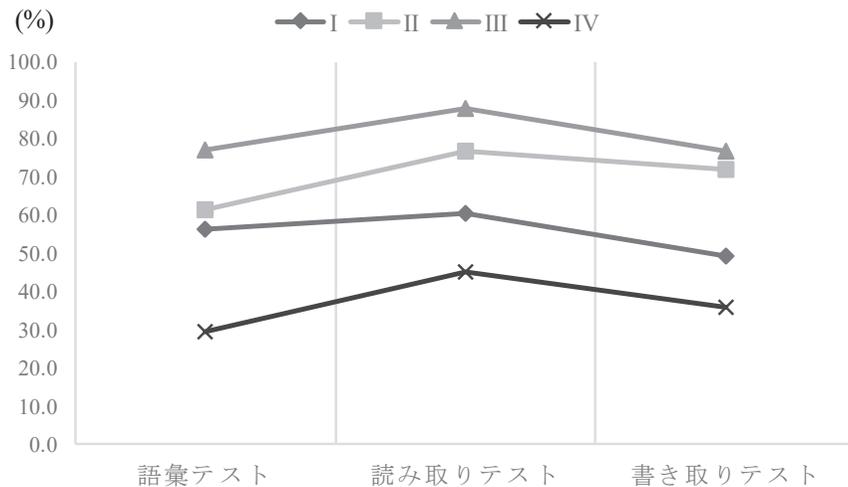


図2 各クラスタの平均正答率のプロット

多変量解析の結果が有意だった[$F(9,237)=15.00, p<.001, \eta_p^2=.36$]ため、一元配置の分散分析を行い、すべての変数において各クラスタ間に有意差がある[語彙テスト: $F(1,81)=51.97, p<.001, \eta_p^2=.66$; 漢字読み取りテスト: $F(1,81)=68.52, p<.001, \eta_p^2=.72$; 漢字書き取りテスト: $F(1,81)=35.94, p<.001, \eta_p^2=.58$]ことがわかった。

さらに、多重比較の結果を検証し、各変数においてクラスタ間に有意差が見られたのかを検討した。語彙テストについては、クラスタ III > クラスタ II ≧ クラスタ I > クラスタ IV という結果になった。漢字読み取りテストについては、すべてのクラスタ間に有意な差がみられた(クラスタ III > クラスタ II > クラスタ I > クラスタ IV)。漢字書き取りテストについては、クラスタ III = クラスタ II > クラスタ I ≧ クラスタ IV という結果になった。以上の結果から、83名のデ

ータを4つのクラスタに分けることは妥当であり、それぞれのクラスタが異なる個人傾向を反映した、他のクラスタと区別されるものであることが確認された。

次に、各クラスタの特徴について述べる。クラスタⅠ(30名・36.1%)は、語彙テスト、漢字読み取りテストの正答率が同程度であり、書き取りテストが語彙テストと読み取りテストと比較して、得点できていないグループである。クラスタⅠの学習者は他のクラスタの学習者と比較して、日本語の語彙知識に対して漢字語彙の読み取りができていない傾向にあり、漢字語彙を書き取ることにはさらに強い苦手意識を持っている可能性がある学習者であると言える。クラスタⅡ(33名・39.8%)は語彙テストではクラスタⅠと有意差がないものの、漢字読み取りテストの正答率はクラスタⅠより有意に高くクラスタⅡの漢字読み取りテストの平均正答率は76.8%であった。クラスタⅡの特徴として興味深いのは、漢字読み取りテストと同程度、漢字書き取りテストも得点できているということである。これは、他のクラスタの学習者には見られない特徴である。クラスタⅡの学習者は、漢字の読み取り・書き取りどちらも学習者が持つ語彙知識以上に得点できていることから、学習者自身が知っている語に関してはそれが漢字表記されても読むことができ、既知語であればある程度漢字で書くこともできると考えられる。クラスタⅢ(15名・18.1%)は、語彙テストと漢字読み取りテストの正答率が他のクラスタの学習者より有意に高く、漢字書き取りテストに関してもクラスタⅠ・クラスタⅣの学習者より有意に高い正答率であった。クラスタⅢの学習者は、語彙知識も豊富にあり、かつ漢字の読み書きも正確にできる、日本語の語彙学習・漢字語彙学習が進んでいる学習者であると言える。クラスタⅣ(5名・6.0%)は、語彙テストと漢字読み取りテストの得点が他のクラスタの学習者より有意に低く、漢字書き取りテストに関してもクラスタⅡ、クラスタⅢの学習者より有意に低い。このクラスタの学習者は、漢字の読み書きに苦手意識を持っていることが想像できる。さらに、彼らの日本語の語彙知識が豊富ではないことが漢字の読み書きにも少なからず影響を及ぼしていると考えられる。

以上のように、本研究の調査協力者であるスリランカ人学習者83名を類似した得点パターンを示す学習者をグルーピングすることにより、非漢字系学習者に語彙知識と漢字の読み書き能力の傾向に4つのタイプがあることを示した。4つのクラスタすべてで、漢字の読み取りテストが漢字の書き取りテストよりよくできており、この結果からスリランカ人学習者の共通した特徴として、漢字の読みが書きより先行して習得されるということが示唆された。さらに、4つのクラスタに共通する特徴として、語彙テストの正答率が高くない場合でも、漢字読み取りテストの正答率は語彙テストの正答率より高い点も興味深い。これは、語彙テストが学習者にとってやや難しかった(平均正答率60.5%)と考えられること、語彙テストが漢字語に限らず、他の種類の語の知識も問うテストであったこと、語彙テストは語の意味を問うテストであったことなど、いくつか理由が考えられる。しかしそれだけではなく、このスリランカ人学習者の得点傾向は、先行研究(Flaherty 1991; 玉岡・高橋 1999; 加納 2001)で指摘されてきた、日本語母語話者の漢字語彙の習得過程と異なる非漢字系学習者の漢字語彙

の習得過程が反映されているとみることもできる。日本語母語話者の場合、漢字を学習する際には既に語の意味と読み(と用法)の情報を持っており、それに漢字の字形の情報を追加するような形で学習を進める(加納 2001)ため、本研究の調査協力者のように、その語の意味はわからないが、漢字語彙を提示されるとそれを読むことはできる、ということはほとんどないと考えられる。しかし、スリランカ人学習者の場合、この調査結果を見る限り、語彙知識の豊富さは漢字の読み書きに無関係ではないものの、学習者によっては語彙知識が必ずしも漢字の読み書きに強く影響しているとは言えず、語彙の意味理解の学習と漢字の読み書きの学習はある程度分離した形で進められていると考えるのが妥当であろう。

4.4. 非漢字系学習者の読み誤りに関する分析

4.4.1. 読み誤りに影響する背景要因

非漢字系学習者にとって、どのような条件が揃うと、漢字語彙を正しく読めるのか。逆に、非漢字系学習者にとって、どのような漢字語彙で読み誤りが起こりやすいのか。この点を明らかにするために、本研究では非漢字系学習者の読み誤りに影響すると考えられる要因を決定木分析(decision tree analysis)を用いて総括的・階層的に考察することを試みた。決定木分析は、複数の説明変数で質的な目的変数を予測するものである。本研究のデータのように、学習者の読み取り能力に、学習者の語彙知識のみならず様々な要因が関わっていると考えられる場合には、有効な分析方法であると考えられる。決定木分析の結果は複数のノードからなる樹形図で示される。樹形図は階層になってあらわれることが多く、樹形図のトップにあたる部分に近いほど目的変数を説明する変数として強い影響を持つ要因である。また、決定木分析では説明変数は同率に扱われ、目的変数の予測に影響する説明変数のみ樹形図にあらわれる。

ここでは、目的変数である漢字の読み取りテストの正誤を、(1)学習者の語彙知識(上位群・下位群)という学習者要因と、(2)テストで問われた語の旧 JLPT 配当級(2 級・3 級・4 級)、(3)語種(和語・漢語)、(4)語の複雑性(画数が多い語・少ない語)という 3 つの刺激要因の計 4 要因で予測した。なお、学習者の語彙知識のグループ分けは、本研究で実施した日本語語彙テスト(大和・玉岡・茅本 2016)で平均点である 21.77 点に最も近い整数である 22 点以上の学習者 45 名を上位群、21 点以下の学習者 38 名を下位群とした。

非漢字系学習者の読み取りテストの正誤に影響する要因を予測した樹形図を図 3 に示す。この樹形図の相対リスクは 20.9%で標準誤差は 0.9%であった。つまり、本変数によって 79.1%を正確に予測することができるという結果であった。樹形図によると、読み取りテストの正誤に最も強く影響する要因は、語の難易度(旧 JLPT 語彙級)であった[$\chi^2(1)=532.46, p<.001$]。旧 3 級の語および旧 4 級の語(正答率 87.6%)は、旧 2 級の語(正答率 37.8%)より有意に正しく読むことができることがわかった。以下、旧 3 級および旧 4 級の語と旧 2 級の語に分けて結果を述べる。

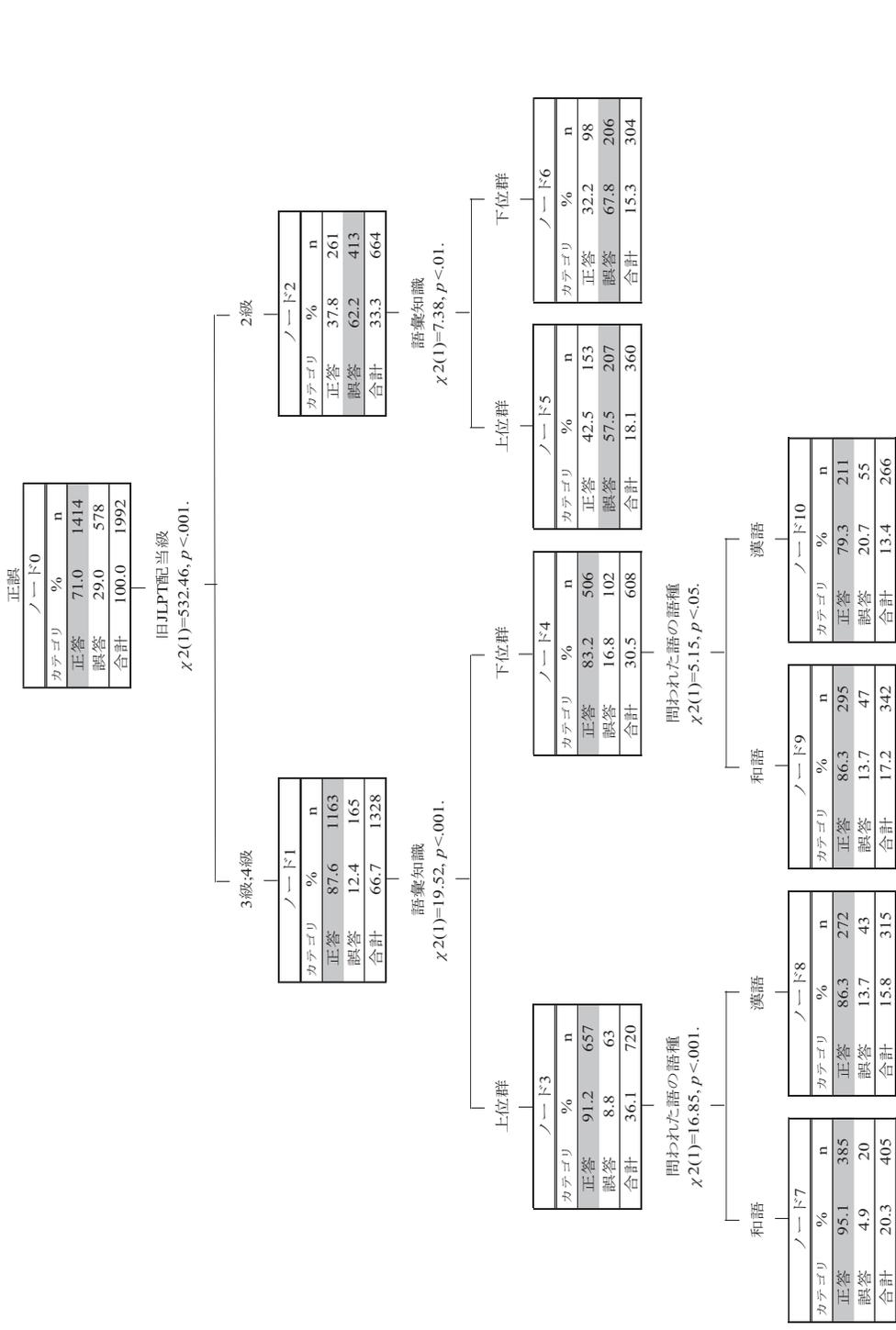


図3 漢字の読み取りに影響する背景要因

旧 3 級の語と旧 4 級の語 (ノード 1)の漢字の読みの正しさに次に強く影響を与える要因は、学習者の語彙知識であった[$\chi^2(1)=19.52, p<.001$]。上位群の学習者(ノード 3 ; 正答率 91.2%)は下位群の学習者(ノード 4 ; 正答率 83.2%)より有意に正しく問われた語の漢字を読むことができた。旧 3 級の語および旧 4 級の語の漢字の読みの正誤において、上位群の学習者にとって次に影響する要因は、問われた語の語種であった[$\chi^2(1)=16.85, p<.001$]。和語(ノード 7 ; 正答率 95.1%)は漢語(ノード 8 ; 正答率 86.3%)より正しく問われた語の漢字を読むことができることがわかった。同じく下位群の学習者にとっても、次に影響する要因は問われる語の語種であった[$\chi^2(1)=5.15, p<.05$]。和語(ノード 9 ; 正答率 86.3%)は漢語(ノード 10 ; 正答率 79.3%)より正しく問われた語の漢字を読むことができることがわかった。

旧 2 級の語(ノード 2)の漢字の読みの正しさに次に強く影響を与える要因もまた、学習者の語彙知識であった[$\chi^2(1)=7.38, p<.01$]。上位群の学習者(ノード 5 ; 正答率 42.5%)は下位群の学習者(ノード 6 ; 正答率 32.2%)より有意に正しく問われた語の漢字を読むことができた。

以上、非漢字系学習者の漢字の読み取りの正誤に影響する要因を示した樹形図(図 3)から明らかになった点は、3 点ある。1 点目は、非漢字系学習者が問われた語の漢字を正しく読むために最も影響する要因は、語の難易度であったということである。旧 3 級と旧 4 級の語の正答率に統計的な有意な差はみられず、同程度正しく読むことができることが確認された。これらの語の正答率は 87.6%と非常に高く、本研究の調査協力者 83 名にとって問題なく正しい読みがわかるようなレベルの語であったと考えられる。その一方で、旧 2 級の語となるとその読みの正答率は大きく下がり、正答率は 37.8%であった。これは、旧 2 級の語の多くが本研究の調査協力者にとって未習の語および漢字であったためではないかと考えられる。この点は決定木分析で示された樹形図のみで判断することはできないため、具体的な漢字の読み誤りの例からさらにその原因を考察する必要がある。

2 点目は、非漢字系学習者が漢字を正しく読むための語の難易度の次に影響するのは学習者の語彙知識であったということである。旧 3 級および旧 4 級の語も、旧 2 級の語も、それぞれのノードは、ともに学習者の語彙知識によってさらに分枝している。このことから、漢字を正しく読むために最も強い要因であるとは言えないものの、学習者の語彙知識も漢字を正しく読むために影響すると考えられる。

3 点目は、非漢字系学習者が漢字を正しく読むことに、テストで問われる(漢字を含む)語の語種の影響は限定的であり、語の複雑性についてはまったく影響がないということである。本研究では、非漢字系学習者の読み誤りに影響すると考えられる要因を予測するにあたって、語種や語の複雑性(漢字の画数)も影響が予想される要因として説明変数に加えた。しかしながら、樹形図によると語種に関するノードは限られた条件下でしかあらわれず、語の複雑性は樹形図にはまったくあらわれなかった。したがって、これらの要因は、漢字を正しく読むということにおいてはほぼ影響しない要因であると考えてよいだろう。

4.4.2. 漢字の読み取りテストの学習者の解答からみる読み誤りの傾向

ここでは、4.4.1.で決定木分析によって示した非漢字系学習者の漢字語の読み誤りに影響する要因を踏まえ、本調査における読み取りテストの解答に具体的にどのような誤りがあったのか分類した。本研究の調査対象者に実施した漢字読み取りテストの全解答は1,992あり、そのうち誤答は578で、これは全解答の29.0%にあたる。これらの誤答を誤りの種類により分類した結果を表6に示す。

表6 漢字読み取りテストにおける誤答の種類とその割合

誤りの種類	例		誤答数	割合(%)
	ターゲット	誤答		
a. 特殊音を伴わない表記の誤り	妹	いもとう	27	4.7
b. 長音・拗音・促音を伴う表記の誤り	金魚	きんぎょう	57	9.9
c. 音読みと訓読みの混同	流れる	りゅうれる	21	3.6
d. 同じ漢字が含まれる別の語との混同	牛肉	ぎゅうにゅう	19	3.3
e. 字形の類似した別の漢字との混同	休む	からだむ	5	0.9
f. 別の語の読みとの混同	妹	あね	49	8.5
g. 語の一部のみ正答			27	4.7
h. 空欄(無解答)			373	64.5
	合計		578	

読み誤りは、空欄(h.)あるいは語の読みの一部のみ書かれているもの(g.)を除き、6種類に分類した。最も多いタイプの誤りは空欄で、全578の誤りの64.5%を占めていた。次に多かったタイプの誤りが、「金魚」を「きんぎょう」と読んだり「外国」を「がいごく」と読んだりするなど、長音・拗音・促音を伴う表記の誤り(b.)で誤答の9.9%を占めていた。このタイプの誤りは比較的、問われた語の難易度が低い(易しい)語に多く見られ、このタイプに分類された57の誤答のうち、30(52.6%)が旧JLPT4級レベルの語、21(36.8%)が旧JLPT3級レベルの語であった。4.4.1.で述べた通り、旧JLPT4級および3級の語の読み取りの正答率は87.6%であったことから、これらの語は学習者の多くにとって既知であったと考えられるが、この結果から、そのような既知語であっても語を正確に記憶していないことに起因する読み誤りが少なからずあったことがわかる。その次に多かったタイプの誤りは、「妹」という漢字を「あね」と読むような誤り(f.)で、読み誤りの8.5%を占めていた。この例のように、同じ意味カテゴリの語と混同していると思われる誤りだけでなく、意味的・音韻的に類似していない別の語の読みを書いている誤答もあった。そのため、f.に分類される誤りの原因は様々あると考えられるが、このタイプの誤りは本調査の調査協力者が非漢字系学習者であるために起こった誤りではなく、漢字系・非漢字系にかかわらず起こりうる読み誤りであると考えられる。この他の読み誤りのタイプについても、非漢字系学習者特有の読み誤りであると断定できるものはみられなかった。

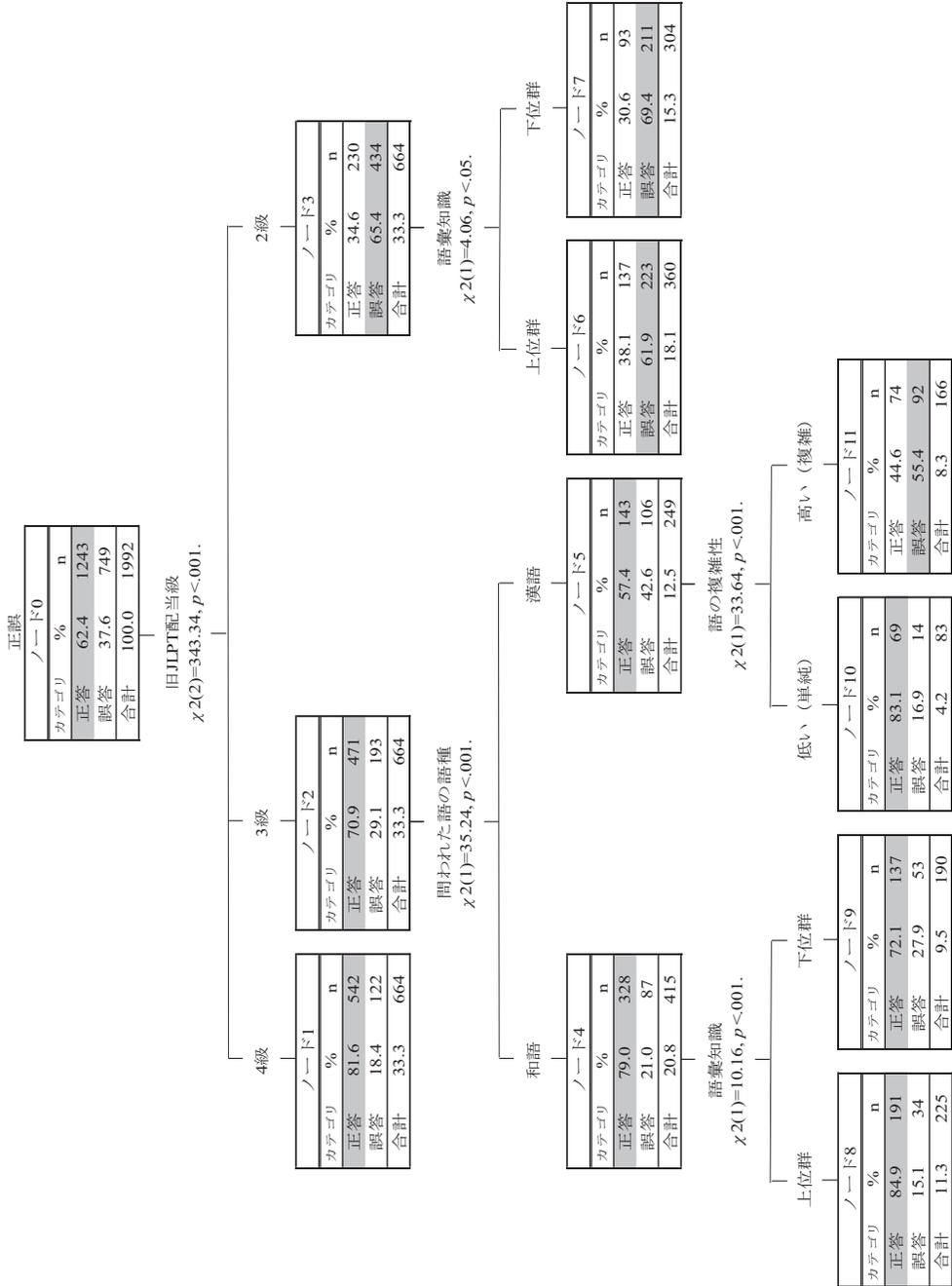
ただし、どのような誤りが多くみられるかは、漢字の読みを問われた語または個人に依存するところも大きいと考えられる。例えば c. に分類された誤りの中には、旧 JLPT2 級レベルの語として出題された「頼る」で「たよる」と読むべきところを「たのる」と読むといった誤りが見られた。複数ある訓読み「頼る(たよる)」「頼む(たのむ)」を混同したと思われる誤りであるが、この誤りは、4.3. のクラスタ分析によりクラスタ III に属する、各テストで比較的高得点であった学習者の間で散見された。それに対して、他のクラスタ(クラスタ I、II、IV)の学習者 68 名は当該問題で 77.9% が無解答(h.) であり、語を見てもまったく漢字の読みが想起できなかった。つまり、難易度が高い語で、複数の訓読みが存在する漢字の読みを問われた場合には、ある程度語彙知識がある学習者の間で特定の誤りのタイプの割合が高くなっていた。また、学習者の個人的な解答傾向として、漢語・和語にかかわらず、問われた漢字のほとんどで音読みしている学習者もいた。具体的には、同一学習者が「流れる」を「りゅうれる」と読み、「改める」を「かいめる」と読んでいた。限られた例のみから結論づけることは難しいが、漢字の読みが複数あることや語によって音読み・訓読みを使い分けなければならないことが定着していない可能性がある学習者もいることがわかった。

4.5. 非漢字系学習者の書き誤りに関する分析

4.5.1. 書き誤りに影響する背景要因

非漢字系学習者にとって、どのような条件が揃うと、漢字語彙を正しく書けるのか。逆に、非漢字系学習者にとって、どのような漢字語彙で書き誤りが起こりやすいのか。この点を明らかにするために、非漢字系学習者の書き誤りに影響すると考えられる要因についても、決定木分析を用いて考察することを試みた。ここでは、目的変数である漢字の書き取りテストの正誤を、(1)学習者の語彙知識(上位群・下位群)というの学習者要因と、(2)テストで問われた語の旧 JLPT 配当級(2 級・3 級・4 級)、(3)語種(和語・漢語)、(4)語の複雑性(画数が多い語・少ない語)、(5)問われた漢字の文字数(1 文字・2 文字)という 4 つの刺激要因の計 5 要因で予測した。なお、学習者の語彙知識のグループ分けは、本研究で実施した日本語語彙テスト(大和・玉岡・茅本 2016)で平均点である 21.77 点に最も近い整数である 22 点以上の学習者 45 名を上位群、21 点以下の学習者 38 名を下位群とした。

非漢字系学習者の書き取りテストの正誤に影響する要因を予測した樹形図を図 4 に示す。この樹形図の相対リスクは 26.5% で標準誤差は 1.0% であった。つまり、本変数によって 73.5% を正確に予測することができるという結果であった。樹形図によると、書き取りテストの正誤に最も強く影響する要因は、語の難易度(旧 JLPT 語彙級)であった [$\chi^2(2)=343.34, p<.001$]。旧 4 級の語の漢字の書き取りの正答率は 81.6%(ノード 1)、旧 3 級の語の漢字の書き取りの正答率 70.9%(ノード 2)、旧 2 級の語の漢字の書き取りの正答率 34.6%(ノード 3)と、それぞれに有意差があることがわかった。以下、これらのノードからさらに分枝していた旧 3 級の語の漢字、旧 2 級の語の漢字について、それぞれ結果を述べる。



上位群

ノード6	%	n	
カテゴリ	38.1	137	
正答	61.9	223	
誤答	18.1	360	

漢語

ノード5	%	n	
カテゴリ	57.4	143	
正答	42.6	106	
誤答	12.5	249	

語彙知識

ノード3	%	n	
カテゴリ	34.6	230	
正答	65.4	434	
誤答	33.3	664	

上位群

ノード6	%	n	
カテゴリ	38.1	137	
正答	61.9	223	
誤答	18.1	360	

漢語

ノード5	%	n	
カテゴリ	57.4	143	
正答	42.6	106	
誤答	12.5	249	

語彙知識

ノード3	%	n	
カテゴリ	34.6	230	
正答	65.4	434	
誤答	33.3	664	

上位群

ノード6	%	n	
カテゴリ	38.1	137	
正答	61.9	223	
誤答	18.1	360	

漢語

ノード5	%	n	
カテゴリ	57.4	143	
正答	42.6	106	
誤答	12.5	249	

語彙知識

ノード3	%	n	
カテゴリ	34.6	230	
正答	65.4	434	
誤答	33.3	664	

上位群

ノード6	%	n	
カテゴリ	38.1	137	
正答	61.9	223	
誤答	18.1	360	

漢語

ノード5	%	n	
カテゴリ	57.4	143	
正答	42.6	106	
誤答	12.5	249	

語彙知識

ノード3	%	n	
カテゴリ	34.6	230	
正答	65.4	434	
誤答	33.3	664	

上位群

ノード6	%	n	
カテゴリ	38.1	137	
正答	61.9	223	
誤答	18.1	360	

漢語

ノード5	%	n	
カテゴリ	57.4	143	
正答	42.6	106	
誤答	12.5	249	

語彙知識

ノード3	%	n	
カテゴリ	34.6	230	
正答	65.4	434	
誤答	33.3	664	

上位群

ノード6	%	n	
カテゴリ	38.1	137	
正答	61.9	223	
誤答	18.1	360	

漢語

ノード5	%	n	
カテゴリ	57.4	143	
正答	42.6	106	
誤答	12.5	249	

語彙知識

ノード3	%	n	
カテゴリ	34.6	230	
正答	65.4	434	
誤答	33.3	664	

上位群

ノード6	%	n	
カテゴリ	38.1	137	
正答	61.9	223	
誤答	18.1	360	

漢語

ノード5	%	n	
カテゴリ	57.4	143	
正答	42.6	106	
誤答	12.5	249	

語彙知識

ノード3	%	n	
カテゴリ	34.6	230	
正答	65.4	434	
誤答	33.3	664	

図4 漢字の書き誤りに影響する背景要因

旧 3 級の語(ノード 2)の漢字の書き取りの正しさに次に強く影響を与える要因は、問われた語の語種であった[$\chi^2(1)=35.24, p<.001$]。和語(ノード 4; 正答率 79.0%)は漢語(ノード 5; 正答率 57.4%)より正しく問われた語を漢字で書くことができたことがわかった。そのうち和語の書き取りにおいては、次に学習者の語彙知識が影響することがわかった[$\chi^2(1)=10.16, p<.001$]。語彙知識上位群の学習者(ノード 8; 正答率 84.9%)は下位群の学習者(ノード 9; 正答率 72.1%)より正しく旧 3 級レベルの和語を書き取ることができたことがわかった。一方、漢語の書き取りにおいては、次に語の複雑性(画数)が影響することがわかった[$\chi^2(1)=33.64, p<.001$]。語の複雑性が低い、すなわち画数が少ない単純な漢字語(ノード 10; 正答率 83.1%)は語の複雑性が高い、すなわち画数が多い複雑な漢字語(ノード 11; 正答率 44.6%)より有意に正しく書き取ることができたことがわかった。

旧 2 級の語(ノード 3)の漢字の書き取りの正しさに次に強く影響を与える要因は、学習者の語彙知識であった[$\chi^2(1)=4.06, p<.05$]。語彙知識上位群の学習者(ノード 6; 正答率 38.1%)は下位群の学習者(ノード 7; 正答率 30.6%)より正しく旧 2 級レベルの語を漢字で書くことができたことがわかった。

以上、非漢字系学習者の漢字の書き取りの正誤に影響する要因を示した樹形図(図 4)から明らかになった点は、3 点ある。1 点目は、非漢字系学習者が問われた語の漢字を正しく書くために最も影響する要因は、語の難易度であったということである。漢字の読み取りテストの結果と異なり、漢字の書き取りテストでは、旧 JLPT 配当級によって正答率に明確に差があらわれた。旧 4 級レベルの語の漢字の書き取りにおいては、さらに分枝するノードが見られなかったことからわかるように、学習者の語彙知識の豊富さ、語種、語の複雑性にかかわらず、83 名すべての学習者が一定以上の正しきで問われた語を漢字で書くことができた。ところが、旧 3 級レベルの語では語によって正答率にも大きな差がみられた。さらに、旧 2 級レベルの語では 34.6%の正答率と、多くの学習者にとってこのレベルの語を漢字で正しく書き取るとは難しかったことがわかった。

2 点目は、非漢字系学習者が問われた語の漢字を正しく書くために、一定の条件下でのみ、学習者の語彙知識が影響するということである。学習者の語彙知識の豊富さは、学習者にとって難しいと思われる語(旧 2 級レベルの語)が正しく書けるか、また本研究の調査対象者にとって、必ずしも親密度が高くはないかもしれないが既習であると考えられる語(旧 3 級レベルの和語)などの一部で影響していた。つまりこの結果は、漢字の書き取りでは漢字の読み取りほど直接的に学習者の語彙知識が影響していないことを示している。これは、非漢字系学習者が漢字を書き取る際には、語彙知識があり、問われた語を知っているだけでは正しく書けるわけではないという事実が反映されていると考えられる。

3 点目は、非漢字系学習者が漢字を正しく読むことに、テストでターゲットとなる漢字語の複雑性の影響は極めて限定的であり、問われている語が 1 文字の漢字であるか 2 文字の漢字であるかは全く影響がないということである。本研究では、谷口(2017)で初見の漢字の再

生に文字の複雑性が影響すると報告されていることを参考に、語の複雑性を説明変数の1つとして加えて分析した。しかしながら、本研究で実施した漢字書き取りテストの結果では、漢字の画数が漢字の書き取りの正しさに影響することはほとんどないことがわかった。

4.5.2. 漢字の書き取りテストの学習者の解答からみる書き誤りの傾向

ここでは、4.5.1.で決定木分析によって示した非漢字系学習者の漢字語の書き誤りに影響する要因を踏まえ、本調査における書き取りテストの解答に具体的にどのような誤りがあったのか分類した。先に示した漢字書き取りテストの正誤は、語単位で正誤を判定したため、正誤判断を行う対象となった83名の調査協力者の全解答は1,992であった。しかし、調査協力者の解答には同音異義語を書くなど語単位で誤りであると判断できるものよりも、非漢字を使用した文字単位で誤りであると判断できるものが圧倒的に多かった。また、ターゲット語が二字漢字語の場合、語を構成する2つの漢字の誤りのタイプは異なることがほとんどであった。そこで、書き誤りの分類とその割合については、漢字1文字ごとに正誤を判断し、書き誤りの分類をすることにした。本漢字書き取りテストではターゲット語24語のうち、二字漢字語が12語、単漢字からなる語が12語あった(表2参照)ため、1文字ごと漢字の正誤を判断すると83名の調査協力者の全解答は2,988となる。この2,988文字の正誤を判断し、誤答を誤りの種類により分類した結果を表7に示す。2,988の解答のうち、書き誤りであると判断されたのは983で、これは全解答の32.9%にあたる。そのうち、66.5%にあたる654解答は空欄になっていた。

表7に示した漢字の書き誤りの分類には、先行研究での分類を参考にした。日本語学習者による(既習漢字の)漢字の再生を作文あるいは漢字の書き取りテストなどオフラインで調べた研究⁴⁾としては、Hatta & Kawakami(1997)、大北(2001)、佐々木(2008)、宮岡・玉岡・林・池(2009)、張・玉岡・初(2017)、大和・玉岡・熊・金(2017)、当麻・大橋(2018)がある。そのうち、非漢字系学習者を扱ったHatta & Kawakami(1997)、大北(2001)、佐々木(2008)では学習者による書き誤りを分類し、どのような種類の書き誤りが多いか調査している。これらの研究で共通して指摘されていることは、非漢字系学習者の漢字の書き誤りには非漢字が数多く存在し、その中でも異なる部品を使用した書き誤り、1画多いまたは少ない書き誤りが多いということであった。これを踏まえ、本研究ではHatta & Kawakami(1997)と佐々木(2008)の分類を参考に、非漢字をさらに分類することにした。表7をみると、実在する別の漢字を代用した書き誤りは105で書き誤りの10.7%を占めていた。一方、非漢字を用いた書き誤りは191で書き誤りの19.4%を占めていた。このことから、非漢字を用いた書き誤りが実在する別の漢字を代用した書き誤りより多いことがわかった。書き誤りの種類別にみても、最も多かった書き誤りの種類は非漢字のうち、突き出るべき箇所がないタイプの誤り(g6-2)で、全ての書き誤りの6.1%を占めていた。次に多く見られた書き誤りが、音が似ている漢字を代用したタイプの誤り(a)で、全ての書き誤りの5.8%を占めていた。

表7 漢字書き取りテストにおける誤答の種類とその割合

誤りの種類	例		誤答数	割合 (%)
	ターゲット	誤答		
実 在 す る 文 字 で の 代 用	a.音が似ている漢字の代用	新(聞) 親(聞)	57	5.8
	b.形が似ている漢字の代用	比(較) 北(較)	28	2.8
	c.意味が似ている漢字の代用	夕(方) 夜(方)	10	1.0
	d.音と形が似ている漢字の代用	坂 阪	6	0.6
	e.音と意味が似ている漢字の代用	予(定) 用(定)	3	0.3
	f.形と意味が似ている漢字の代用	耳 目	1	0.1
非 漢 字 の 使 用	g1.非漢字：1画多い、または少ない	夕(方) 夕(方)	36	3.7
	g2.非漢字：異なる部品を代用	走る 走る	48	4.9
	g3.非漢字：部品の配置の誤り	病(院) 病(院)	7	0.7
	g4.非漢字：部品の付加または脱落	(産)業 (産)業	9	0.9
	g5.非漢字：g1-4を組み合わせた誤り	互い 互い	21	2.1
	g6-1：非漢字(その他一向きが違う)	病(院) 病(院)	13	1.3
	g6-2：非漢字(その他一突き出るか否か)	使う 使う	60	6.1
	g6-3：非漢字(その他一線の長短)	読む 読む	3	0.3
	g6-4：非漢字(その他一部品の分解)	予(定) 予(定)	14	1.4
	g6-5：非漢字(その他一非部品の利用)	空 空	13	1.3
i.空欄(無解答)		654	66.5	
合計			983	

本研究の調査協力者に見られた書き誤りは、非漢字系日本語学習者の漢字の書き誤りを分析した先行研究(Hatta & Kawakami 1997; 大北 2001; 佐々木 2008)と比較して、書き誤りが多かった種類(下位分類)は多少異なるものの、書き誤りの大まかな傾向には共通する点もあった。まず、共通点として挙げられる点は、書き誤りのうち、非漢字を書いている割合が高い

という点である。本研究の調査協力者とは異なる日本語の語彙知識および日本語学習歴の非漢字系学習者の書き誤りのデータで同様の傾向がみられたことから、非漢字系学習者に共通する傾向として、漢字の形を正確に捉えることが困難であることが改めて確認できた。一方、中国人日本語学習者を対象に日本語の漢字の書き取りテストを行った張・玉岡・初(2017)では、具体的な書き誤りの割合は報告されていないが、誤りの種類として(1)同音語を書く誤り、(2)L1 中国語と L2 日本語の漢字(字体)を混同した誤り、(3)まったく書けないという3種類に大別され、その中でも(1)の誤りが圧倒的に多かったと報告されている。つまり、中国人日本語学習者の漢字の誤りには、非漢字の使用はみられなかったということになる。この非漢字系学習者と漢字系学習者(中国語母語話者)の書き誤りに見られる特徴の違いは、母語の書字形態に漢字を持つかどうかという点が漢字のまとまりの認識に影響を及ぼしている例と考えることができる。

次に共通点として挙げられる点は、学習者の解答にみられた非漢字と分類される書き誤りの中でも、異なる部品を代用し非漢字を書くという誤り(g2.)と1画多いあるいは少ない非漢字を書くという誤り(g1.)が多い点である。これは、非漢字系学習者がそれぞれの漢字で視覚的に印象に残る部分を記憶し、その部分に点や短い縦線・横線を付加するようにして漢字の字形を完成させているからではないかと考えられる。そのため、学習者にとって記憶に残りにくい部分の部品が誤っていたり、細かい部分の点や線が欠落したりするのかもしれない。実際、本研究の調査協力者の解答にもこの種の非漢字を書いた例が散見されたが、いずれも正答となる漢字と雰囲気似ているものがほとんどで、学習者にとっては視覚的に記憶に残りにくいであろう、細かい点で異なる部品が使われている例が多かった。

以上のような先行研究との共通した書き誤りが見られた一方で、本研究での調査協力者の書き誤りの傾向で先行研究と若干異なっている点もあった。それは、本研究の調査対象者の書き誤りには、音が似ている漢字を代用するタイプの書き誤り(a.)の割合が先行研究で報告されていたより多かったということである。これは、学習者の漢字の書き誤りの抽出方法が研究によって異なることが関係していると考えられる。先行研究の一部(例えば、佐々木 2008)では、学習者が書いた作文から書き誤りを抽出した。それに対し、本研究では漢字の書き取りテストの解答から書き誤りを抽出した。両者は、学習者にとって書き誤りが見られた漢字(語彙)の産出過程が異なっている。作文では、学習者自身が意味的に適当であると考えた語からその漢字表記を想起する。また、仮に学習者がその漢字を正しく書けるか自信がなければ、その漢字を書かない(回避する)ことが可能である。一方で、漢字書き取りテストでは、出題者が指定する語の読みがひらがなで提示され、その語の意味を知っているかどうかにかかわらず、漢字を書くことになる。そのため、学習者は出題された語の漢字表記の記憶があいまいであった場合、音が同じあるいは似ている漢字を代用してしまう可能性が高い。そのため、本研究の調査協力者の書き誤りには、音が似ている漢字を代用する書き誤りが多かったと考えられる。

5. 総合考察

5.1. 非漢字系学習者の日本語の語彙知識と漢字語彙の読み書き能力の関係

本研究では、まず日本語の語彙テスト、漢字の読み取りテスト、漢字の書き取りテストの結果から、日本語の語彙知識と漢字の読み書き能力との関係を探った。その結果、日本語の語彙知識、漢字の読み、漢字の書きのそれぞれには中程度以上の相関関係があることが確認された。また、漢字の読み取りテストは漢字の書き取りテストより高得点であった学習者が大半であることから、非漢字系学習者にとって漢字の読み書きでは、漢字の読みが書きより先行して習得されることが明らかになった。ただし同時に、語彙テスト、漢字の読み取りテスト、漢字の書き取りテストの得点バランスは学習者によって個人差があることもわかった。この点は、漢字の読みの習得が漢字の書きの習得より明らかに先行しているとされた韓国人日本語学習者の傾向(大和・玉岡・熊・金 2017)とは異なる点で、その理由の1つは学習者による語彙テストおよび漢字の読み書きテストの得点バランスの個人差だと考えた。

そこで、本研究では、非漢字系学習者の語彙テスト、漢字読み取りテスト、漢字書き取りテストの得点バランスと傾向から、クラスタ分析により、学習者のグルーピングを試みた。その結果、語彙テスト、漢字読み取りテスト、漢字書き取りテストの得点バランスで調査協力者を4つのクラスタに分けることができた。非漢字系学習者全員が漢字の読み書きを苦手としているのではなく、むしろ語彙知識の豊富だとは言えないが漢字の読み書きがよくできる学習者がいるという、クラスタ分析が示したこのような結果は、非漢字系学習者に接している日本語教師の直感とも一致すると考えられる。ただし、語彙知識は豊富でなくても漢字語彙の読み書きができるということは、言い換えると、漢字語彙の意味と漢字語彙の読み(音韻)・書き(書字)が連携された形で語を覚えることができていることを示している。そうすると、作文などで実際に漢字語彙を適切に運用することが難しくなる恐れもある。本研究の調査協力者の場合、約40%の学習者が語彙知識の豊富さの割に漢字の読み書きができているグループ(クラスタⅡ)に属していることから、このような特徴を持つ非漢字系学習者は決してめずらしくないと考えられる。本研究では調査協力者に普段使用している漢字語彙学習ストラテジーを質問していないため断定することはできないが、今回の調査結果から、漢字語彙の持つ読み(音韻)と書き(書字)の対応にばかり着目して漢字語彙学習をしている学習者もいるであろうことが推察される。この点は、非漢字系学習者に対して漢字語彙学習の方法を指導する機会があれば、留意すべき点の1つであると言える。

5.2. 非漢字系学習者の漢字語彙の読み書きへの影響要因と誤答からみえる特徴

本研究では、漢字読み取りテストと書き取りテストの結果から、それぞれのテストで正答できるように影響する要因について決定木分析を用いて明らかにした。その結果、漢字の読み取りにおいても、漢字の書き取りにおいても、これらの正誤に影響する要因と想定して設定した複数の要因のうち、最も強く影響を及ぼすのは、ターゲット語となっている漢字語彙

の難易度であった。漢字読み取りテストの難易度別の正答率は JLPT4 級の語 \geq 3 級の語 $>$ 2 級の語で、漢字書き取りテストの難易度別の正答率は旧 JLPT4 級の語 $>$ 3 級の語 $>$ 2 級の語であった。これは漢字読み取りテストと漢字書き取りテストが(他の要因に左右されることなく)語の難易度を反映したテストであったというだけでなく、非漢字系学習者の場合、母語と日本語の漢字表記の同根語がなく、母語での語彙使用頻度などの影響を受けることがなかったことにより、日本語の語彙の難易度がそのまま漢字の読み書きの正答率に強く影響を及ぼしたと考えられる。

一方、影響要因の1つとして設定していた学習者の語彙知識は、漢字の読み取りには語の難易度の次に影響を与えていたが、漢字の書き取りには学習者の語彙知識はさらに限定された条件下のみで影響を与えていた。このように語彙知識がそれほど漢字の書き取りに強く影響を与えていない理由の1つは、ターゲット語の漢字(書字)が想起できたとしても、それを正確に書くことができないという非漢字系学習者ならではの問題が関係していると考えられる。本研究の調査対象者の書き誤りを観察すると、正しい漢字と雰囲気似た非漢字を書いている例や非漢字の中でも正しい漢字とは言えないものの、学習者がどの漢字を書こうとしていたのか判別できる程度の書き誤りの例も多かった。それら細かい部分の書き誤りについては、そもそも書き誤りと判断するかという点で意見が分かれる可能性もある。しかし、このような誤りが多く見られることから、非漢字系学習者が各漢字の中で印象に残りやすい部分に注目し記憶していると思われること、またそれ以外の点については注意が向きにくいことなど、これまでの文字正誤判断課題などで見られた非漢字系学習者の漢字および非漢字の誤認の傾向(大和・玉岡 2017) と類似している傾向が、漢字の書き取りにおいても確認できた。これを踏まえ、漢字の書字を授業で扱う場合には、学習者にとって注意が向きにくい漢字の細かい部分にも注意が向けさせる工夫が必要になろう。例えば、書き誤りの例を正しい漢字とともに提示するなどして、両者の違いを認識できるよう、学習者へ気づきを促すことも有効かもしれない。

このように本研究では先行研究を支持する結果が得られた一方で、これまでの非漢字系学習者を対象とした漢字(語彙)処理の研究の結果と一部異なる結果も見られた。例えば、漢字(語彙)の認知処理では漢字の書字的複雑性がその正誤に影響していることが知られている(谷口 2017; 大和・玉岡 2017 など)が、本研究では漢字の読み取りにも書き取りにもターゲット語の書字的複雑性の影響はほぼなかった。これは、本研究で用いた漢字の読み取りテストと書き取りテストが、学習者の処理の結果を反映しているためで、学習者の処理の過程を反映している実験研究の結果と異なる点があるのは、ある種当然のことであるとも言える。しかしそれだけではなく、非漢字系の漢字未習者が漢字を再生する場合には書字的複雑性の影響が最も強く表れていた(谷口 2017)ことを考えると、本研究の結果は、大北(2001)が指摘しているように、非漢字系学習者の漢字の全体的な形の把握は、漢字学習のごく初期から始まっていることを裏付けるものであると言える。そして、非漢字系学習者には漢字学習をす

る過程で漢字を構成する部品をとらえる能力がしだいに備わっていくことにより、複雑な漢字でも単純な漢字でも同程度正確に書き取ることができるのだと考えられる。

また、いくつかの先行研究では日本語母語話者(玉岡・高橋 1999)、韓国人日本語学習者(宮岡・玉岡・林・池 2009)が漢字語彙を語の単位で想起していると指摘していたが、本研究では非漢字系学習者が漢字語彙を文字単位、語単位いずれの方法で想起しているかは明らかにできなかった。本研究の調査協力者の読み取りテスト・書き取りテストの解答からは、文字単位で漢字の読みおよび書字を想起していることをうかがわせる解答、語単位で漢字の読みおよび書字を想起していることをうかがわせる解答どちらも存在した。この点を明らかにすることは、今後の課題としたい。

参考文献

- ヴィモンヴィタヤー チョーラッター(2013)「非漢字圏学習者の漢字字形の識別に関する事例研究—タイ人高校生日本語学習者を対象にして—」『筑波大学地域研究』34, 247-270.
- 大北葉子(1995)「漢字学習ストラテジーと学生の漢字学習に対する信念」『世界の日本語教育』5, 105-124.
- 大北葉子(2001)「漢字の書き誤りが漢字教育に示唆すること」国立国語研究所『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』pp.19-28.
- 海保博之・Haththotuwa Gamage Gayathri Geethanjali (2001)「非漢字圏日本語学習者に対する効果的な漢字学習についての認知心理学からの提言」『筑波心理学研究』23, 53-57.
- 加納千恵子(2001)「外国人学習者による漢字の情報処理過程について—漢字処理技能の測定・評価に向けて—」『文藝言語研究 言語篇』39, 45-60.
- ガヤトゥリ ハットトワ ガマゲ(2006)「非漢字圏日本語学習者の漢字学習意識に関する研究—スリランカ学習者を対象として—」『日本語科学』20, 67-78.
- 桑原陽子・玉岡賀津雄・坂野永理(2004)「漢字の読みの習得に関する時系列分析—入門期の非漢字圏日本語学習者を対象に—」『岡山大学留学生センター紀要』11, 47-58.
- 佐々木良造(2008)「マレー人日本語学習者の作文にみられた漢字の書き誤り」『世界の日本語教育』18, 201-213.
- 田中敏・山際勇一郎(1992)『新訂ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』教育出版.
- 谷口美穂(2017)「非漢字系日本語学習者の漢字再生を困難にする諸要因」『日本語教育』167, 1-12.
- 玉岡賀津雄・高橋登(1999)「漢字二字熟語の書字行動における語彙使用頻度および書字的複雑性の影響」『心理学研究』70(1), 45-50.
- 張婧禱・玉岡賀津雄・初相娟(2017)「中国人日本語学習者は日本語の漢字の書き取りが正しくできるのか?」『中国語話者のための日本語教育研究』9, 53-69.
- 当麻文・大橋真喜子(2018)「ICUの学生における漢字書字の誤り—特徴と書字指導の試み—」

- 『日本研究センター教育研究年報』7, 62-80.
- 平井明代(編著)(2018)『教育・心理・言語研究のためのデータ分析』東京図書.
- 本田弘之(2020)「教えるための文字・語彙」遠藤織枝編著『新日本語教育を学ぶ なぜ、なにを、どう教えるか』pp.120-139.三修社.
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄・林炫情・池映任(2009)「韓国語を母語とする日本語学習者による漢字の書き取りに関する研究—学習者の語彙力と漢字が含まれる単語の使用頻度の影響—」『日本語科学』25, 119-130.
- 宮原温子・藤森景子(2020)「非漢字圏初級漢字学習者が漢字学習に求めるもの」『日本語教育方法研究会誌』26(2), 20-21.
- 柳田しのぶ(2011)「非漢字圏日本語学習者における漢字学習への意識—フランスの大学生を対象に」『JSL 漢字学習研究会誌』3, 8-13.
- 大和祐子・玉岡賀津雄・茅本百合子(2016)「フィリピン人日本語学習者のデータを基にした非漢字圏学習者向け語彙テストの開発と評価」『ことばの科学』30, 39-58.
- 大和祐子・玉岡賀津雄(2017)「非漢字圏日本語学習者の漢字認知のメカニズム」『CAJLE2016 Proceedings』289-294.
- 大和祐子・玉岡賀津雄・熊可欣・金志宣(2017)「韓国人日本語学習者の語彙知識と漢字の読み書き能力との因果関係の検討」『ことばの科学』31, 39-58.
- Gamage, G. H. (2003) Perceptions of kanji learning strategies: Do they differ among character and alphabetic background learners? *Australian Review of Applied Linguistics*, 26(2), 17-31.
- Flaherty, M. (1991) Do Second-Language Learners of Japanese Process Kanji in the Same Way as Japanese Children? 『世界の日本語教育』1, 183-200.
- Hatta, T., & Kawakami, A. (1997). Kanji writing errors in Japanese college students and American Japanese students. In Hsuan-Chih Chen (Ed.), *Cognitive Processing of Chinese and Related Asian Languages*, pp.401-416.
- Leong, C.K., Cheng, P. W., & Mulcahy, R. (1987). Automatic processing of morphemic orthography. *Language and Speech*, 30, 181-196.
- Kaiho, H., & Saito, H. (1989). Measuring various aspects of Kanji (Chinese characters) and its psychological implications. In S. Mizutani (Ed.), *Japanese Quantitative Linguistics*. pp.151-163.
- Tamaoka, K., Kirsner, K., Yanase, Y., Miyaoka, Y., & Kawakami, M. (2002). A Web-accessible database of characteristics of the 1,945 basic Japanese kanji. *Behavior Research Methods, Instruments & Computers*, 34, 260-275.
- Yokosawa, K. & Umeda, M. (1988). Processing in human kanji-word recognition. *Proceedings of the 1988 IEEE international conference on systems, man, and cybernetics*, 378-380.
- 付記：本稿は JSPS 科研費 JP19K00737、JP22K00665 の助成を受けた研究成果の一部である。

注

1) 韓国人日本語学習者を漢字系の学習者とするか非漢字系学習者とするかには、さまざまな意見がある。韓国語を母語とする日本語学習者が持つ漢字語彙の知識については、韓国語と日本語には同じ漢字由来の語が使用されており、それらの中には音韻類似性の高い語もある。しかしながら、韓国内で韓国語を使用する場合は、漢字由来語であってもほとんどハングル表記されるため、韓国語と日本語で同じ漢字由来語が使用されていても、書字的に同定することは難しい。実際、日本語の漢字の書き取りテストでは韓国語に同じ漢字由来語があっても、正しく漢字で書き取ることができない例も見られた(大和・玉岡・熊・金 2017)。そこで、本稿では韓国人日本語学習者は漢字系日本語学習者とも非漢字系学習者とも異なる日本語の漢字語彙知識を持つと考え、議論する。

2) 本研究では、シンハラ語を母語とするスリランカ人日本語学習者の漢字の読み書きに見られる傾向を、非漢字系学習者の漢字の読み書きの傾向として論じる。中国語母語話者、韓国語母語話者の場合、それぞれの母語と目標言語である日本語との間に同形同義語が存在しているため、学習者の母語によって漢字の読み書きの特徴が異なると考えられる。しかしながら、母語に漢字由来の語が存在しない非漢字系学習者の場合、母語によって漢字の読み書きの特徴が異なることはないようである。日本国内の教育機関で学ぶさまざまな出身国・母語の非漢字系学習者の漢字の読みを調べた桑原・玉岡・坂野(2004)では、新出漢字と既出漢字の読みの習得傾向にはいくつかのパターンがあることが示されたが、非漢字系学習者の母語によって漢字の習得傾向に特徴がみられることはなかったと報告されている。

3) 国際交流基金が 2019 年にまとめた「2018 年度日本語教育機関調査結果」によると、スリランカの日本語学習者 8,454 名のうち、全体の 80.1%にあたる 6,768 名が中等教育機関で日本語を学習している。同報告では、1979 年にスリランカの A レベル試験の選択科目に日本語が採用されたことをきっかけに日本語学習者数が増加し、2018 年には 1,211 名が A レベル試験で日本語を選択したと報告されている。

(参照 URL: <https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/srilanka.html>)

4) ここでは、語彙性判断課題(lexical decision task)や自己制御読み課題(self-paced reading)などに代表される言語のオンライン処理を調べる方法に対してペーパーテストなど言語のオフライン処理を調べる方法をとったという意味で「オフライン」という表現を用いている。オンライン処理を調べることで調査協力者が言語を処理している過程を知ることができるのに対し、オフライン処理を調べることで調査協力者が言語を処理した結果を知ることができるとされている。